

平成24年度第2回「宮崎県生涯学習審議会」議事録

1 日 時

平成24年8月28日(火) 14:30～16:30

2 場 所

県庁4号館4階 教育委員会室

3 出席者

宮崎県生涯学習審議会委員

宮本 和子	宮崎市清武町地域婦人連絡協議会会長・宮崎県地域婦人連絡協議会監事
片野坂千鶴子	特定非営利活動法人みやざき子ども文化センター代表理事
中村 かよ	ガールスカウト宮崎県連盟長
山田 敦子	宮崎県PTA連合会 副会長
志野崎 陽子	川南町立山本小学校 校長
川崎 順子	九州保健福祉大学スポーツ健康福祉学科講師
中元 智恵	NPO法人こじいの森こどもの時間所属・都城市安久児童館児童厚生員
山田 裕司	宮崎大学 産学・地域連携センター准教授
黒田 泰裕	日南商工会議所事務局長
池田 浩子	小林市立幸ヶ丘小学校放課後子ども教室コーディネーター・NPO法人こばやしハートム理事
永友 康久	御池青少年自然の家所長
岡林 稔	放送大学宮崎学習センター所長
平沼 邦子	(株)宮崎放送報道制作局長代理兼テレビ制作部長
柳瀬 美津子	南九州短期大学 国際教養学科講師
佐藤 善次郎	高千穂町教育委員会教育次長
宮崎 幸生	県市町村教育委員会連合会会長・(宮崎市教育委員会教育委員長)

事務局(生涯学習課)

津曲課長、恵利課長補佐、大津主幹、森山主幹、甲斐社会教育主事

4 開会行事

- 諮問文手交
- 山本教育次長あいさつ

## 5 事務局説明

### ○ 諮問について

- (1) 成年期における継続性・実効性のある生涯学習施策はどうあるべきか。
- (2) 県内高等教育機関と連携し、県民の「学習の場」の充実をどう図ることができるか。

※成年期の定義・・・20歳～40歳までの世代と捉える。

- 成年期における県の施策・事業の状況について
- 成年期教育の状況について
- これまでの成年期教育について

## 6 協議 成年期における親の学びについて

会長： 「成年期における今後の生涯学習の施策の在り方」の中から「成年期の親の学びの必要性」についての的を絞って、今後の生涯学習施策の在り方の方針をお示しできるように意見交換をお願いしたい。

委員： 成年期の定義が20歳から40歳までということで、私たちの子ども世代の問題だと思いき、今の親世代の問題をいわれると非常に胸が痛くなる。今、ノーメディアデーということが言われているが、私たちが子育てしている頃は時代の流れで子育てを経験してきて、みんながTVを見始めたころで、TVの影響をあまり考えなかったそういった時代の子どもたちが今親世代になっている。今の親教育をどうやって進めていくかというときに、私たち世代がもう少し学ばなくてはならないと感じる。

委員： 小中学校の家庭教育学級で子育ての講演のアンケート結果では、「もうちょっと早く聞いておけば良かった」という感想がたくさんでした。子育てがもう終わりにかかったときに、「こういう育て方をした方がいいですよ」といわれても遅いので、20歳代のお母さんや今子育て中のお母さんに聞かせてあげたい。子育て真っ最中のお母さんたちは子育てで忙しかったり、仕事で時間がなかったりで機会がないので、今の20歳代、子育て中のお母さんたちが参加できるような仕組みを作ってサポートできれば今から子どもを育てるときに良いのではないか。

委員： 婦人会で家庭教育学級に協力して、私たちが子育てについての成功・失敗談を話したことがある。そのときに校長・教頭先生に婦人会による講座を家庭教育学級のカリキュラムの中に入れて欲しいと話したこともある。また、子育て支援センターでお母さんたちに子どもへの接し方について話したことがあるが、身近なことを話すので、母親たちは真剣に聞いてくれる。50歳から60歳代は、子育てについていろいろな経験をしているので、もう少し家庭教育学級等で話す機会があればよいと思っているが、学校に行き話す機会ができない。

委員： 婦人会が学校を支援してくれている。家庭教育学級への参加については、父親が少ない。懇談会でお母さんに話を聞くと、「お父さんが『家読』などで協力してほしい。」と言う話や「家庭教育学級での子育ての話を聞いて欲しかった」という意見を聞く。父親のPTAの行事関係の参加は多いが、子育てに関することに父親が参加していない状況がある。

委員： PTAと家庭教育学級のお父さんは親の学びの必要性とか、内容とか、20歳から40歳までのお父さんたちの学ぶ場があるだろうか。行きたいんだけど仕事があり、残業がある。

20歳から40歳までの時期に、会社の中にずっといたり、会社の仕事ばかりして、60歳(定年)を迎えた時に、組織以外でどれだけネットワークを持っているのか、会社だけの人間になってしまって、定年後の人生はどうなるのかと思う。

20歳から40歳のころに、会社・組織以外に友達を持つとか交流を持つ、つまり「学ぶ場」を持つことが必要ではないか。そのような時間をもっている人は非常に魅力的である。会社勤めをしながら、夜、自己研鑽に励んだり、バンドを組んで曲を作って歌ったり等、非常に魅力的である。家庭教育学級には行けないけれど、その他で学ぶことができる人が、子どもと向き合って話ができるお父さんになれるのではないかと。

一番忙しい20歳～40歳の時期に学ぶ場や学ぶ環境を作ってあげることは大事だと思う。

委員： 今強く感じるのは親が子育てにおいて、加減がわからない、狭い範囲内で子供を見てしまう、自分の子供を通して外が見えないという状況がある。周りの子供から自分の子供を見るようにさせると、親も落ち着く。

青少年自然の家では、現実社会とは離れているが、活動の上ではマナー・モラルが重要である。このマナー等を意識した指導者が連れてくる児童生徒は、安定し充実した研修をして帰る。ところが、事前の指導で青少年自然の家についての説明をしているにもかかわらず、ビジネスホテル感覚で宿泊にくる指導者がいる。指導者も公私をわきまえ、児童生徒を適切に指導して欲しい。

私たちは貧しい中で育ったけれど、温かく育てられた気がする。自分の子育てについては厳しくしたかもしれないが、温かく育てた。現在自分の娘が子供を育てている様子を見ると、子育てに関する視野が狭い。今子育てをしている世代やこれから子育てをする世代に子育てに関するいろいろな学習の場があるとよいと思う。

3泊4日のボランティア養成講座に参加した学生4名が、活動に参加した子どもたちがちょっと外れた行動をしたときに、その場その場で的確に指導を行ってくれた。このようなことを学ぶことは、子どもたちにとっては貴重な体験であり、社会性に大きくつながっていくのではないと思う。

委員： 最近の傾向として、人間関係をつくれないう若者が増えているように感じる。親デビュー前の教育が必要ではないか。今までは、※五人の先生がいたから、親デビュー前の心構えがなくても、親について指導をしてもらえる先輩、周りの人がいた。しかし、今の人は、親デビュー前の教育ができていない状況の中で親になっている。

〔 ※五人の先生・・・身の回りの祖父母・兄弟姉妹・ガキ大将・近所の世話やき  
「おじさん」「おばさん」・自然の総称 〕

子供が小さいうちに子育ての仕方を教え導いてくれる相手、学習の場が必要である。

子供が小学校・中学校と成長していけば、自分の教育スタイルは見えてくるので、家庭教育学級等でさらに深められるが、親デビューの前にしっかり学ぶことで、そのあとの教育が、さらに良いものになっていくのではないかと思う。

委員： 子どもが小中高校の時に、学校での行事に積極的に参加する子供は、上下関係をよく知っている。参加していない子供は、人間関係づくりが難しい。だから、地域にも様々な行事があるので子供を積極的に参加させることも必要である。小さい時から学校行事に積極的に参加させるよう親が仕向けることが大切である。

例えば、公衆浴場ではあいさつをすることや他人に迷惑をかけないような入浴の仕方など、公私の区別がわかるように小さい時から躰を受けて成長していくと親となったときに役立つ。

委員： 親になった人はPTA、子供会、少年団とかに関わり、色々な人に関わらなければならないし、子どものためには何とか時間を作って参加している。

問題なのは親にならない大人。この数が相当な数になってきている。親になっていない人たちをどうするのか、取り残していいのか。地域の中での学びも必要なのではないだろうか。

委員： 小林で老人の居場所づくりを始めている。しかし男性が少ないということで月に1度男の居場所を作った。1ヶ月1回会合を開いている。12、3名の若い男性、夜の仕事の人、引きこもりの人が参加している。私たちが今まで地域の中で学んでいたことをNPO等の勉強会や、いろいろな会合で話したりして、それを補っていけないのではないか。

委員： 今の現状を考えると学習の機会はたくさんある。例えば、県内には青年会議所や、商工会議所ではYEG、日南商工会議所には振徳塾など学べるところがある。

そういうところを勉強の場と捉えることも大切だと思う。

「親の学び」について、子供を育てるために「親の学び」をするのか、地域を育てるために「親の学び」をするのか、考える必要があり、政策にするためには絞っていく必要があると思う。

以前、「地域で学びの活動にでたことがあるのか」という質問をしたときに、教育関係者は「PTAに参加した」と答えられたことがある。PTAに参加したことを学びの場と考えると私たちは今それ以上に学びの場をたくさんもっていることになる。それをどうつなげているか、そして、そこにどうアクセスしていくか、そして、家庭教育学級に出かけていくことはできないのか、それを企業研修に組込めないのか、そういうことをしっかり考えていくことが大切なのではないだろうか。

委員：取材などを通して感じるのだが、イベント等に参加される方はいろいろな所でも参加して、いろいろな学びをしている。市や県のイベントに全部参加している方もいる。一方で、全く参加する場を知らない人も多い。メディアを利用しても、PRが限られていることもあり、「こういうイベントがあったのよ」「いい話を聞いたのよ」と話をして、「そんなの知らなかった」という人の方が多い。結果的に参加される方が限られてしまい、どうしても学びが広がらない。

Facebookなど、ネットの活用も含めて、PRの在り方を考える必要があるのではないだろうか。

委員：企業で役員、地域で役を担っている人はいろいろな場に参加する機会があるが、企業の中で働く親は、そういう機会がなかなかつくれない。企業においても親の学びの場があるという宣伝も必要である。生活がかかっているので休んでまでは行けない親がいるので、学びの場を企業の中に作ったり、ITを活用し、学びの場の情報を共有することができるようになれば、情報をいろいろ選択できるようになる。

委員：ネット社会への対応に触れなければならぬ。私たちはイベントをするときには、経費のかかるチラシはつくらず、ブログやツイッター、Facebookで1万人集める。

Facebookから情報を得ての交流会というのは県内でも盛んである。

また、今の子育て世代のお父さんはすごくやさしい。私たちに比べてやさしく、奥さんを大事にして子どもをすごくほめ、新しいすばらしい父親の姿である。

この人たちはすごく学びたいという気持ちもある。だから、支援する情報と場を与えてあげたら、すばらしい父親になるのではないか。

委員：PTAの立場からですが、「家庭教育」と言われ、一番頭が痛いところである。PTAだけでなく地域にもたくさん学ぶ場もある。学校を通していろいろな研修の機会があり、子どもと一緒に体験する場、地域の中で、まちづくりの方からのいろいろな情報、研修の場を与えていただいている。PTAも家庭の教育力の向上にむけて、研修の場をたくさんつくってはいるが、なかなか参加してもらえない。

今の若いお父さんは子育てに大変熱心である。小学校の参観日は平日にも関わらず、たくさん参加している。しかし、そこからお互いが繋がっていない。お父さん同士のつながりを日常の自然な所に作っていくことが大切だと思う。

委員：企業の中で「親の学び」の機会を設けることに少し強制力を持っていいのかなと感じた。家庭教育学級では、参加される方はいつも来られるけれど、本当に来てほしいという方が来られないのが現状でなかなか難しいところもある。今、携帯電話とかPCの普及で価値観が多様化しており、個人主義ですし、生活様式もずいぶん変化している状況の中で、若いお母さんが一人で子育てをしている方も多い。子どもたちに生活様式の変化によるいろいろな影響が出ていると感じている。

わたしが今一番感じるのは、乳幼児期の子育て中の保護者の方々に親の学びを行うことが自分が成長するうえで、一番重要なことではないかと思う。

委員：月に1回登山に行くが、子育てが終わった方や家族連れが多いのが特徴である。結構お父さんが子どもを連れてくる家族の姿を見るが、今の親というのはサービス精神がかなりすばらしいと感じる。長年の不況により経済状況が厳しい状況の中、子育てしている世代の親も大変な状況下にあるが、子育てに熱心で良い印象がある。

今の子育てしている親は、制約されることを嫌いな世代ではないか。ゆとり世代かなと思う。私たちが20歳～40歳を語る時、彼らの世界観・人間観とかをリサーチして考えていかなければならないと思う。

また、メディア社会は便利だが、プラスの部分マイナスの部分があると思う。

委員：テーマが広すぎてまとまりがつかないが、委員の皆さんからの御意見をいただき、「親の学び」とは何なのか、ある程度大きな項目分けはできそうな気がしてきた。

じゃ、「学ぶ」とは何を目的に、何を学ぶとって私たちは論じているのかと考えたときに、成年期における継続性・実効性のある生涯教育というのは、いい親になるために、すなわち次世代の親をいい親にするための観点から語っているのか、それとも生涯学習施策として試しているのか、整理をつける必要がある。

会長：これからの審議の方向についての提案をさせていただく。

いろいろな方面からいただいたご意見を生かして、今後どのように審議を続けていくかということが後半の部分になる。

副会長：成年期の学びを通して何を私たちは求めているのかというと次世代の成人、よき成人を作るすなわち持続可能な生涯学習の施策ということになるのではないだろうか。

「学び」とは何かといった場合に、「学び」を親としての学びというのか、親としての学びを通して健全な次世代を創出するのか、という2点に分かれると思う。

その中でどういうふうに「学び」というものを構築していくのかというと、皆さんの御意見から共通だった意見は、「場の創出」だったと思う。ではその場で何を学ぶのかというのは、母親としての学び、父親としての学び、婦人会・NPO等、地域社会にある組織を通しての学びの場の提供とか、いろいろな方面で語れると思う。

最終的には、継続性・実効性のある生涯学習施策を我々は作っていかねばならないので、私たちが審議会の中で求めている「学び」とは、何なのかということをもう少し見える形にしていかないとまとめていくには大変だと思うので、これからの課題は何を「学び」とするのかについてご検討いただきたい。

委員：副会長が言われたように、確かにその点について、説明していかなければならないと思う。また、気になっているところが諮問の2について、諮問の1と2の関連性をどう今後もっていくか、諮問1を決めてから諮問2に行くのか、諮問1・2両方を頭に入れながら議論していくのか、理由の所は両方はいっているんで、そこの視点が少し、先ほどの議論ではずれていたように思うので、私たち高等教育機関としてどうアプローチしていけるのか、そこがどう関わっていけばよいのかが大きい。今回はどういう流れで審議していくのか教えて欲しい。

事務局：今回は事務局の説明は審議の視点1について説明させていただいた。ここで議論していく中で、今日はいろいろな学びの場があった。視点2についての話はいよいよたくさん意見が出てきたときに、高等教育機関がどんなことができるか、ヒアリングをやっていかなければならない。まず今回は、視点1について審議を進めていただきたい。

また、各高等教育機関ではたくさんの公開講座が行われているので、そこを結びつけて、企業の中で親の学びの場を作ったり、講師の派遣、運営の予算の問題など、ご提案をさせていただき、答申内容が充実すると思う。

委員：2年間で答申を出すということであるが、何回ぐらい会議があるのか。

事務局：視点1と2で7回審議をお願いしたい。7回審議を行った後の答申ではなく、皆さんがご提案いただき、中間とりまとめも考えている。来年度すぐ取り組めるようなものがでてくれば、来年から取り組みたいと思っている。例えば意見をいただいた企業内の研修などがあると思う。

今回、御意見をまとめた上で、途中委員へお返しして、新しい御意見をいただいたりすることも考えている。

委員：生涯学習推進は主にやるのは市町村で、今までやってきた生涯学習のやり方は社会の変化により行き詰まっている。これから先どんなふうになればよいか悩んでいる。県が進めるのはよいが、県は市町村とどんなふうに関連していこうと考えているのか。

事務局：現在も市町村・関係団体の支援をしている。今後も新しい生涯学習施策を進める上で連携させていただく。今回皆様が審議いただいたものを施策にまとめて、まとめるときに県が直接実施するだけではなく、連携して取り組んでいくスタンスでやりたいと思う。

会長：今回の諮問に対して、最初の御意見をいただきました。今日の御意見を参考に、今後の審議を進めていきたいと思えます。

